



いわれている発電用原子炉についての研究開発態勢はどうかということである。もちろん原子炉を使

わなないでやれる実験もたくさんあるが、発電用原子炉の材料（燃料棒などを含めて）がその内部条件——はげしい中性子と高温——のもとでどれくらいつかえるか、この点が、原子力発電所のコストをはじくうえで、大きなポイントである。

そこで米英加ソ仏などではそれぞれ材料試験炉をもって、そのよ

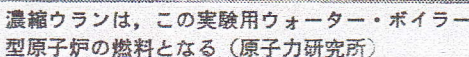
うな試験を行っているわけだが、この試験は一定の時間がたたねば結果がでないので、現在のところ、種々のコスト予想は仮定の値にもとづいて計算されているものやむをえない次第だ。

したがって将来ある程度自力で発電炉を開発しようとする国にと

きる材料試験炉は、不可欠という

のが原子力の専門家の常識である。だとすれば日本の原子力計画に材料試験炉が顔をみせないのは非常に不自然であるといわねばなら

（間 弘明）



107